逆転の発想

小学校５年生の春、私は卵巣腫瘍の手術を受けた。臍下には１５センチ程の傷ができた。“手術を頑張った勲章”と前向きに捉えていた。

退院し、1年も経っていない時、風邪をひきかかりつけ医の診察を受けた。腹部の触診を受けるために、診察台に横になり服を捲った直後の事。いつも笑顔の看護師の顔が引きつった。ズボンや下着を下げる手伝いをしてくれるが、１歩引いたような大勢で物をつまむように、汚いものを触るように私に接する看護師。手術前にここに来ていた時は、こんなことはなかった。「あぁ、傷があるからか」と思ったものの、とてもショックだった。あの時の看護師の表情、動作は未だに忘れることができない。

その日以降、看護師を始めとする医療職者が嫌いになった。何も知らない人からは医療の道へ進むことを勧められたりしたが、嫌な記憶のある医療の道へ進むという選択は私にとってあり得ないものであった。

高校生になり、進路希望調査がある度、教育学部志望は政治経済学部、心理学部と次々に変わり、安定せずにいた。将来のことを真剣に考えなければと思っていた時、「入院や手術を経験したんだから、それを生かして看護師になればいいのに」そう言われていた小学校時代の事を思い出した。今までであれば、そんなのあり得ないと思うところなのだが、この時はそうはいかなかった。経験を生かすというのは何も、看護師にお世話になったから・憧れがあるから・恩返しをしたいから、といったものばかりではないのではないか。自分の中の看護師に対する負のイメージは、自分が看護師になることで変えることができるのではないか。自分自身が看護師になることで、私と同じ経験をする患者さんを守ることができるかもしれない。そんな思いが次々に浮かび、止まらなかった。今までとは違う、逆転の発想であった。

進路希望調査には“看護学部志望”と毎回書くようになり、一度も考えが揺らぐこともなかった。看護大学や専門学校を志望している周りの人とは、少し違った志望理由ではあった。しかし、この思いが決して揺るがないのは、それほど看護に対する思いが強いからなのである。

「私と看護」。以前は仲が悪く犬猿の仲であった。しかし今、私にとって看護という存在は、よきパートナーであり、よきライバルであるような、そんな存在である。これからも、この思いを大切にし、勉強に励んでいきたい。そして、私と同じ思いを患者さんにさせないような看護師になる、これが今の目標である。その時が来たら、私の中の嫌な記憶が良い記憶になることを願って、逆転の発想に感謝して、これから邁進していきたい。